

お願いする勇氣

山口県 三隅中学校 3年 山本 普貴

右を向いてもビル、左を向いてもビル。完全に迷ってしまった。新幹線の時間もあるし、3時までには駅に着いておきたいのに、これでは間に合わない。

慣れない街での散策に、二、三度成功したことのある僕は、ちょっと調子に乗っていた。今さら後悔しても遅いのだが、とにかく今は早く駅に戻らなくては。交番だって都合よく目の前に現れてくれるものでもない。周囲には、忙しそうに行き交う人、人、人。この中の誰かに声をかけて引き止めて、道を尋ねる？ 恥ずかしい。勇氣が出ない。冷たくされたら？ いろいろなことが頭の中で回る。でも最後に勝ったのは、「時間がない」こと。

「すみません。駅まではどう行けばいいか教えていただけませんか？」

と、ようやく声をかけることができたのは、30代くらいの女性だった。僕が、勇氣を振りしぼって声を出したことを一瞬で忘れさせるかのように、その人は気持ちのよい笑顔を向けてくれた。第一声は、

「大丈夫よ。私もいっしょに近くまで行くことができるから、行きましょう。」

「大丈夫よ」。そのひとことがどんなに心強い言葉であるか、僕は今まで本当の意味で知らなかった気がする。僕は初対面の大人に対する緊張でガチガチになりつつも、明るく声をかけてくれるその人との会話に集中した。その女性は、自分の仕事で転勤になり、次に住むこの街で、新しく住む家を探しているところだった。別に駅に戻る予定ではなかったらしいが、自分が街を覚えるにもちょうどよいしと、地図を見ながら駅までいっしょに歩いてくれたのだ。なんと、自分は用事がないにも関わらず、僕を連れて行くためにわざわざ歩いてくれているのだ。

駅までの道は、彼女のおかげで気まずさもなくて、あっという間であった。僕が駅を確認すると、

「じゃあ、気をつけて。」

と足早に去っていった。僕の「ありがとうございました」という簡単なお礼に、少しほほえむような会釈をして。

彼女と別れて僕は、何とも言えない温かな気持ちが広がることに気づいた。見ず知らずの人に対して、自分の予定を変えて手助けをすること。言葉で書くと簡単だが、決してそうではない。不安でいっぱいだった僕は、その人のその言動で、新幹線に間に合うこと以上に、幸せな気持ちになれた。これが「親切」か。単純にその人を手助けするだけでなく、その人に温かな気持ちを与えること。すごい力だ。

でも、もう一つ気づいたのは、助けてほしいとお願いすることの大切さだ。これには勇氣が必要だ。ただ、最初のきっかけさえ作れば、案外人はすぐに手を差し伸べてくれるものなのかもしれない。

この時、僕が学んだのは二つのこと。「親切」はすごい力を持っている。そして、勇氣を出して助けを求めよう。